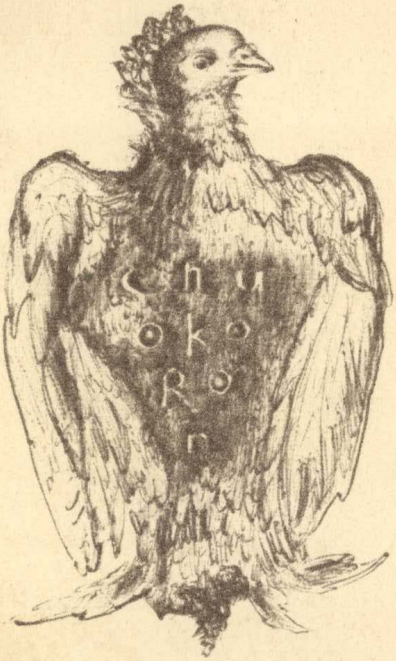

バナナ

獅子文六

バナナ　普及版 ⓪ 一九六一 検印廃止

昭和三十六年八月十五日　初版印刷
昭和三十六年八月二十日　初版発行

著　者　獅子文六
発行者　栗本和夫
印　刷　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
振替東京三四番

価　二二〇円

バナナ

中央公論社

目　次

クレとゴ…… 5
唄ばやり……21
車……35
バナナ師……52
食補……65
商人の家……79
移情閣……90
ウーさんの席…… 108
お符…… 118
センチメンタル・グレー…… 132
一家争鳴…… 145
日本の洋食…… 156
前夜祭…… 166
敵影…… 177
黄色い花輪…… 185
父と子…… 195
青ブクの歌…… 202
大人たち…… 216
スイカの季節…… 228
月影落ちて鈴虫鳴く…… 247
バナナと下痢…… 264
我們熱愛和平…… 278

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

クレとゴ

新式な洋間にはちがいないのだが、明るい反射を期待してる壁面に、草色のドンスが張ってあったり、パイプ脚のイス・テーブルの背後に、ラデンの輝く書棚が控えていたり、安井曽太郎の静物の隣りに、康有為の聯(れん)が下っていたり、何か、トンチンカンな居心地である。しかし、室の中は、ユンケルの大きな石油ストーブで、汗が出るほど暖められ、広々とガラスを用いた南面から、朝の光が豊かに射し込み、街の雑音も、あまり耳立たないから、東京の冬の住居としては、快適の方であろう。

テーブルの上には、食べ荒らした朝飯の食器が、そのままになってる。中央の大丼にカユの残汁がよどみ、カラシ菜の油いためや、赤い豆腐や、色のよくない漬物なぞが、大皿小皿の中に、わずかな影を留めている。

恐らく、そんな食物を、タラフクつめこんだと見えて、厚地のパジャマも破れんばかりに、大きな腹をつきだし、行儀悪くイスにのけぞりながら、新聞を読んでる男は、かきあげた頭髪が、薄くなってはいるが、体重二十二貫——いや八十二キロ以上はありそうな、福々しい人物である。しかし、眉毛が太く、眼玉が大きく飛び出し、厚い唇がへの字に結ばれた人相は、なかなか大規模であって、近頃の日本人には珍らしかった。まず、大藩主とか、豪賊の面がまえであって、人は畏敬するだろうが、よく見ると、ガタガタ普請のような、気安い点がないでもない。大きな眼玉も、新聞の活字を追いながら、トロンとして、視線もさだかでなかった。といって、居眠りをしているのではない証拠に、時々、ゲーッと、すばらしいゲップの音を、立てるのである。

その向側に、黄色ッぽいウールの茶羽織を着て、レースのようなものを編んでる細君は、美人ではあるが、顔が小さく、鋭く、細い首に青筋を浮かしている。皇族のように、面高で、なで肩で、その上、姿勢を正し

てるから、大変、品がいいけれど、眼つきだけは、料亭のオカミのように、スキがない。まだ、四十を越したか越さぬかと見えるのに、右の額ぎわから、ハケではいたように、一流れの白髪が見える。その他の部分は黒々として、そのシラガの部分も、端の方は美しい茶色を呈して、三段のシブい色調を誇っているのは、天然現象とも思われなかった。

彼女は、さっきから、良人が大きなゲップを放つ度に、眉を動かしていたが、それよりも気にさわる対象を見出した。

「いやだわ、まだ、ハイがいる！」

一疋の冬のハエが、室の暖かさに活動を始めて、食べ残しの皿の上を舞っていた。女中さんが、いつまでも下げにこないから、こんなことになるのである。

「あら！」

ハエは、ついにカユの丼に飛びこむと、残汁に羽根をとられて、バタバタしだした。

細君の叫びを聞いて、良人は静かに顔をあげたが、やがて、太い腕がのびて、ブツリと、ハエをつぶしてしまった。

「まア、きたない。なんてことをなさるの」

細君は、良人を烈しく叱りつけただけでは気がすまず、腕をつかんで、イスから立ち上らせた。

「手を洗ってらっしゃい！」

八十二キロの体重が、何の抵抗もなく、洗面所の方へ移動していくのと、入れちがいに、若い女中さんが現われた。

「あんた、いつも、おかたづけがおそいのね。二人いるんだから、どっちか、手があいてるはずよ」

「一しょに、お食事してました」

「かたづけものが済んでから、お上りなさいよ。グズグズしてるから、お丼にハイが飛びこんじゃったわよ。もう、それ、使わないから、犬の食器に廻して……」

女中がムッツリして、皿小鉢を運び盆にのせ、台所に去ろうとすると、

「龍馬は、まだ、起きないの」

「お坊っちゃまですか、さア……」

「もう、九時でしょう。起して頂戴」

そこへ、良人が帰ってきた。
「よく、お洗いになって？」
「うん」
「消毒しとくと、なおいいんだけど……」
それには答えないで、良人は、またイスにもどって、新聞をとり上げた。
「あなた、龍馬のことですがね」
細君は、イスを寄せた。
「うん」
「この頃、少しヘンだと、お思いにならない？」
「そうさな」
「夜おそく帰ってくるのは、いまに始まったことじゃないけど、この頃は、おそくなり方がちがうと思うの」
「どう？」
「つまり、マージャンやパーティでおそくなるんじゃないらしいの」
「それなら、結構じゃないか」
「逆よ。あたしは、普通の交際以上のことが、始まったんじゃないかと、心配してるの」
「いや、大丈夫だ。あいつは、全学連へは入らんね」
「そんなこと、考えちゃいないわ」
「わからんな、すると……」
「あら、わかってるじゃないの。あの子だって、もう、二十一ですよ。その上、女友達も、大勢いるんですよ」
「だから？」
「恋愛よ、きっと、そうよ」
細君は、思い余って、そういったのに、良人は、大口を開いて、笑い出した。ひどく重量に富んだ、塩気のきいた笑声である。
「お笑いになることはないでしょう」
「ハッハハ」
「あなたは、どうして、そう不真面目なの。たった一人の息子が、恋愛を始めるとなったら、あたしたちの大事件よ。少しは、ご自分の若い時のことを、考えてご覧なさい……」
少しは、自分の若い時のことを、考えてみろ、とい

われて、良人は、キョトンとした顔をしたが、これは、今に始まったことではない。

細君は、年と共に、その誤解を深めていくようである。今では、抜くべからざる信念となってるようだが、彼としても、何分、昔のことであるから、ハッキリしたことはいえないにしても、彼等が夫婦となった動機が、彼の方からモチかけた恋愛ではなかったと、断言できるのである。その経過も、格別のハナバナしさはなかったと、記憶するのである。しかし、細君の方では、あだかも、二人の結びつきに、大恋愛があって、あらゆる周囲の反対と戦い、やっと一緒になったと、思ってるばかりでなく、その恋愛の火つけ役は、彼であって、彼女は、熱情に圧倒されて、焔を燃やすに至ったのだと、信じていないと、どうも、世の中が面白くないらしいのである。

「そう思いたければ、そう思わしとくだけのことだ。わたしの方では、どっちでも、一向、差支えないのだからな」

ただ、最近、細君の幻想が、よほど昂進してきて、何かにつけて、過去を装飾したがるのは、迷惑というよりも、彼女の変調として、気がかりでないこともない。四十代になって、女が恋愛の再評価なぞ始めるのは、穏当といえないのである。

一体、彼が細君の紀伊子と結ばれたのは、シナ事変の起った年だから、二十何年もたっているが、彼女と知り合ったのは、それより五年ぐらい前で、彼女は、まだ、四ツ谷のF女学校の下級生だった。彼も、神田のM大学へ、毎日、国鉄電車で通うので、一緒に家を出ることもあったが、友達と会っても、誰もからかう者がなかったほど、紀伊子は、子供っぽかった。

彼は、呉天童といって、台湾人であり、その頃は日本国籍を持っていたが、実質的には、異国の留学生だった。尤も、中学時代から、東京へきていて、その学校の寄宿舎へ入っていたが、M大学へ進むと共に、日本人の良家の風に浴せよ、という父の命令で、千駄ヶ谷の紀伊子の家に、食事付きの部屋借りをすることになった。

紀伊子の家は、浅草橋で油問屋を営み、千駄ヶ谷の

住宅も、相当の普請で、父親が存命だったら、台湾留学生を下宿させることもなかったろうが、母親と二人暮らしになってから、その家と地所が唯一の財産という運命に落ちて、呉天童との繋りを生じたのである。

呉天童は、まったく、手のかからない下宿人だった。何を食わしても、どんな扱いをしても、少しも文句をいわないし、その上、台湾の生家が富んでいるから、下宿料以外の付届けもあった。母親が、先ず、彼に好意を持った。紀伊子は、最初、彼をバカにしていたのだが、女学校卒業前になって、突然変異を起した。

原因といえば、彼女が親しい同級生と、口論したことからなのだが、その友人は、卒業すると、すぐ、許婚者の毛並みのいい青年と、結婚する予定だった。

「あたし、そんな結婚、絶対反対よ。あたしは、自分で選んだ、自分の好きな人でなくちゃ……」

「じゃア、どんな人？」

「男の中の男よ」

行きがかりで、彼女も、飛んだことを口走ったが、そんな男が、この時代に、ザラに見当るわけもなかった。しかし、友人の幸福にヤキモチが半分としても、後の半分は、真剣な幻でもあった。一種の思春期現象かも知れないが、紀伊子は、ニキビ大学生とか、チンピラ会社員なぞが、不潔で、コセコセして、メメしくて、ひどく反感をそそられたが、それとはまったく反対の男が、必ず出現することを、疑わなかった。その代り、その男が、どんな階級の生れであれ、どんな無教育の男であれ、敢えて辞さないというよりも、むしろ、そんな男である方が、注文にかなった。気性の烈しい娘が、家運の没落に会うと、そんなことを考えるのであろう。

しかし、男の中の男というむずかしい第一条件に、たまたま呉天童が当選したのは、奇妙であった。彼が手近にいたことは争えないが、怠け者で、粗忽家で、食いしん坊で、金儲けの才覚を知らず、立身に興味がなく、しかも、台湾人である男に、まだ十八歳の乙女の方から、烈しい想いをささやいたのだから、普通ではなかった。ただ、容貌だけは、呉天童も、西郷隆盛を近代化したような偉相であって、体格もそれに準じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ていた。看板だけは、男の中の男であった。そして、彼が台湾の生れであることは、紀伊子にとって、何の障害でもなかった。彼が日本の国内で生れていたら、彼女も、夢の描き方に制限を受けたにちがいない。

とにかく、二人の結婚は、彼の方が受けて立ったのが、真相であって、現在、彼女が考えてるような、ハナバナしいものではなかった。尤も、台湾人と結婚するということで、周囲の反対があり、彼女がヤッキとなって闘った事実はあるが、それも、大恋愛の波瀾というほどのものではなかった。

二人は東京で結婚したが、披露式は台湾で行われた。紀伊子も、赤い絹の花嫁服を着せられ、三日間も宴会が続いた。その頃は天童の父も存命で、商売は栄えていた。

しかし、天童は、間もなく、家業をつぐ意志のないことを明らかにし、日本で生活したいと告げた。父親は自分が無学であったから、息子を日本の大学に学ばしたのだが、もし天童が日本で官吏とか、学者とかになるならば、彼の望みを許すといった。天童は、日本へ帰りたい一心で、直ちに承諾した。そして、呉商行の後継者は、弟の天源ときまったが、彼は兄とちがって、商人に生れついたような男であり、決して人情家でもないのに、位を譲ってくれた兄を徳とし、今もって、報仕を忘れないのである。

呉夫婦は日本へ帰って、千駄ヶ谷の紀伊子の家を、彼女の母から買い受け、そこに住み続けたが、天童は、父親と約束したように、日本で官吏にも、学者にもなる様子はなかった。もともと、紀伊子の異国趣味も、台湾人の義父母と共に暮らしたいほど、強烈ではないことを、天童もよく知っていたし、彼は彼で、日本にいなければ充たすことのできない欲望を持っていたから、故郷に留る気がなかったのである。

彼は少年時代から東京で暮らしてる間に、すっかり食いしん坊になってしまったのである。うまいものを食う時ほど、人の世に生れた甲斐を感ずることはなく、それも、食通といわれるような味覚の批評家ではなくて、自分の好きなものを、ガキのように、むさぼり食

うのが、無上の愉しみだった。そして、生国の中国料理は勿論のこと、日本料理も懐石料理からウナギ、てんぷら、すし、おでんに至るまで、どんなものでも好きであり、また、フランス料理も、日本式洋食も、トンカツまで大好物で、要するに、何でもござれの食いしん坊なのだが、自分でウマいと感じた店のものでなければ、見向きもしない見識は持っていた。だから、なまなかの日本人より、彼は東京の和洋料理店を知っている。そして、世界中の都で、東京ほど、食うことに恵まれたところはないと、思ってる。洋食だって、洋行する必要がないほど、各国の料理が食べられるし、日本食は関西料理、長崎料理、秋田料理まである。そして、大小の料理店の数の多いことといったら、これまた世界一で、銀座、新宿、渋谷へ行くと、食べもの屋でない店を探す方が、骨が折れる。

東京は、天童にとって、天国であり、台湾からの仕送りで、働かないで、うまいものばかり食う生活を続けるうちに、紀伊子が男の子を産んだ。天童は、天龍と命名したかったのだが、紀伊子は相撲取りの名のようだといって、真向から反対した。そして、龍馬という名に落ちついたが、その頃の日本の空気からいって、その命名は賢明だった。彼の姓でも、呉をゴといわずに、クレと呼ぶ方が、利益のある場合が多かった。

龍馬が四歳を迎えた時には、大東亜戦争の中期だったが、天童は逸早く、台湾へ疎開した。食物の都東京に食物が欠乏しては、無意味であり、台湾はまだ豊富なことを知ったからである。

終戦後一年経って、彼は妻子と共に、東京へ出てきた。もはや、彼は日本人ではなくなっていたが、戦後の東京では、その方が住みよく、クレよりもゴとして、第三国人の利益にあずかった。尤も、彼としては、戦前だって、自分を日本人だとは思っていなかったし、現在も、台湾政府に愛想をつかしてると同時に、中共政府を少しも信用する気になれないから、具体的な中国人意識の持ちようがなかった。

天童夫婦が再び東京の人となったのは、結婚後十年目だったが、夫婦も十年一緒になってると、たいがい気ごころも知れると共に、良人として、また妻として

の値打ちもわかってくるもので、紀伊子も、どうやら、男の中の男へ嫁いだというのは、錯覚だったと、思うようになっていた。朝から晩まで、ゴロゴロしていて、ウマいものを食う工夫ばかりしてる良人は、

「豚の中の豚よ」

と、罵りたくもなるが、それを口に出していえないのは、彼女も、買いかぶりの罪が自分にあるのを知ってるし、そして、追々に、世間がわかってくると、男の中の男なんて、オバケよりも存在の怪しいものだと、アキラメがついてくるからでもあった。それに、天童は男の中の男ではなかったにしても、良人として、寛大この上もなく、ヤキモチもやかず、とりたてた浮気もせず、結構な旦那であることが確実で、別れたところでトクはなかった。

ところが、戦後三年目ぐらいに、天童は弟の天源の入れ知恵もあったが、どういう風の吹き廻しか、生れて始めて商売というものをやって、大金を儲けたのである。その頃は、第三国人が濡手に粟のつかみどりをやって、誰も儲けた時代だが、天童は台湾の弟から送ってくる物資を売り、日本から薬品や機械を送り、往復貿易で儲けたが、その金の全部を、東京の地所買入れに注ぎ込んだのが、当ったのである。その頃は、台湾と通商協定もなし、密貿易も公然で、勝手なことができた上に、東京の地価は、タダのように安かった。

彼が商いに乗り出した期間は、二年間ぐらいなもので、その間は、生れ変ったような活動家になったが、正規の貿易が始まる頃から、ピタリと手をひいて、また、もとの徒食生活に返った。しかし、彼の目星をつけた地所は、バカバカしい値上りを見せ、また、台湾の弟も、儲け過ぎて政府に狙われ出したので、神戸へ店を移し、そこを本拠にして事業をひろげ、兄への仕送りを断たないから、天童の家の生計は豊かで、数年前に、赤坂台町に、現在の美邸を新築した。そして、彼の偉相も一層カンロクがつき、いつの間にか、新華僑の頭株に、祭り上げられた。新華僑というのは、大陸出身の在日華僑に対し、台湾人の華僑をそう呼ぶのであるが、戦後、その連中が頭角を現わし、旧華僑をしのぐ勢力を持ってきたのである。

こうなってくると、妻の紀伊子も、少し戸惑い始めた。
「ことによると、やっぱり、男の中の男……」
と、最初の鑑定を、思い出したのである。尤も、途中でアキラメたことを、取消すまでには、まだ遠かった。世間では、良人の相場が上ったけれど、家の中ですることを見ていれば、昔と少しだって変らず、豚の中の豚といいたくなる所業も、かなり多いのである。

呉天童も、永く日本に住んでいながら、朝飯だけは、中国風でないと承知ができず、おカユに四川菜(しせんさい)は、欠かしたことはないが、その他に、季節の野菜料理一、二品で、いかにもウマそうに、ゆっくり朝の食事を愉しむのが、通例だった。食いしん坊のたたりで、慢性胃炎をわずらっているが、おカユは三杯ぐらい、きっと平らげるのである。
「紀伊さん、空飛ぶ円盤が、日本にも出たらしい。写真とった少年がおる……」
天童は、新聞を見ながら、突然、大きな声を出した。
「どうだって、いいわよ、そんなこと……」
細君は、さっき、話の腰を折られた恨みが、残っていた。
「どうでもよくはない。宇宙旅行ができるか、どうかいうことに、大関係あるからね」
「あなた、月の世界へでも、行きたいの」
「行きたくはない。しかし、行かなくてはならん時がくるかも知れん」
そのような、とりとめないことをいうのは、良人の癖であるから、細君も、対手にならなかった。
しかし、天童は、案外マジメな調子で、
「日本が、北京政府の支配でも受けるようになれば、ぼくには住みにくくなるから、アメリカに逃げるつもりでいたが、アメリカも怪しくなる日がないとはいえんわけだ。すると、宇宙旅行の必要が起きてくるわけではないか」
これには、紀伊子も笑い出した。
「あんた、そんな神経質なところがあるの。頼もしいわね」

「ぼくは、どちらかといえば、そういう気質だね」
「あら、お見それしたわ。ところで、月世界へ行くのもいいけど、今日は、あんた、総社へ行くことを、忘れちゃダメよ。午ご飯の会だったわね」
「今日だったかね」
「そーら、ご覧なさい。きっと、忘れてると、思ったわ」
「あんな会は、どうでもいいのだ……」
天童は、中華民国在日華僑東京総社という長い肩書の会の幹部なのだが、めったに、顔出しをしたことがなかった。今日は、台湾からきた要人の歓迎午餐会があるので、主だった新華僑は、全部、顔を揃えるのだが、彼は日を忘れるほど無頓着だった。中共政治を恐怖するくせに、台湾の方にも、背を向けてる男なのである。
「いらっしゃらないの、じゃア……」
「なるべくな」
「行かないなら、行かないで、さっきの龍馬の問題を、ゆっくり相談して頂戴よ」
「そんな問題が、あったかな」
「いやだわ、張り合いがないっちゃありアしない……」
と、細君が舌打ちをしたところへ、ドアが開いて、当人の龍馬が姿を現わした。
いい体をした、足の長い青年で、顔が締ってるのは母親似だが、眼鼻立ちの巨大なのは、父親譲りであろう。近頃の若い者には珍らしく、頭を坊主刈りにしているが、黒と赤のV字襟の白いスエーターを着てるところは、皇太子さんや、石原裕次郎と同様である。
「早くから、起されちゃったよ。なんか、用？」
と、文句をいいながらも、表情は屈托がなかった。
「ちっとも、早かないわよ。もう、十時よ」
母親は、編み物をやめた。
「ところが、今日は、休講があってね。朝寝は、予定のうちさ」
息子は、父親のそばに行って、ピースのカン入りから、一本抜き出した。両親に、〝お早う〟のアイサツ

をすることを、母親は常に要求するが、彼はそれを怠って久しいのである。
「ゆんべ、ちょいと、飲み過ぎちゃってね」
「あんた、まだ学生だってことを、忘れないでね」
「学生だから、飲むんだよ。サラリー・マンになっちゃ、飲み代もあぶねえからな」
いうことがナマイキである代りに、まったく、日本人の日本語である。そこへいくと、父の天童の日本語は、注意深く聞く人には、発音の怪しいところがある。しかし、父親の方は、中国人と会っても、立派に、広東語をしゃべるが、龍馬は、全然、ダメである。彼は日本語だけしか、言語を持たない。従って、日本語で、ものごとを考える。自分の血液が、半分だけ日本人であることぐらいは知ってるが、気分的には、百割の日本青年なのである。
「何いってんの、まだ、お酒の味もわかりアしないくせに……。昨夜は、どんな連中と、一緒だったの」
母親は、探索の第一手を下した。
「どんな連中って、いつもの連中さ……。そんなことよりさ。酒田の奴がさ、酔っぱらやがってね、金もねえのに、踊りにいこうっていうから、おれア……」
そこへ、女中さんが、コーヒーとトーストをのせた盆を、運んできた。龍馬は、父の好きなシナ・ガユには、まったく興味がないので、彼だけ別な朝飯を食うのを、例としていた。
「今日は、朝飯ぬきにすらア……」
と、彼は手を振った。
「すると、酒田さんとご一緒だったの。それから……」
母親は、探索を続けた。
「近藤だの……」
「それっきり？」
「男はね」
「女のお友達が、あんなおそくまでご一緒だったの。どなた？」
「サキベーさ」
「いつか連れてきた、お嬢さん？」
と、母親の眼が光ったが、
「お嬢さんてシロモノでもねえけどさ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong